

平成16年度最終報告書

<活動の目的>

慢性的な食糧不足が深刻なブルキナファソにおいて、ネリカ米を普及させることにより、ブルキナファソ農村地域の食糧、経済事情の改善、貧困消滅に貢献することを目的とします。

ブルキナファソの平均寿命は44才ですが、農村部では38才が平均の数値であります。感染症・寄生虫症での死亡率が高いことは保健省のデータにより明らかであり、5才満の乳幼児死亡率が30%を越している村落は珍しくなく、今回申請地区であるサピナ村も同様です。農民は貧困・病気に苦しんでおり、基礎医薬品も買えない状態です。現地ではほとんどが自給自足の生活であり一家（10人家族）の現金収入は8,000円/年間、以下といわれております（ブルキナファソの一人当たりのGNPはUS\$190/2001年度）。また、大規模ではないにしろブルキナファソ農村部では数年ごとに干ばつが起きており、貧困に拍車をかけております。

全ての元凶は貧困からであり、ネリカ米の普及による生活（財政）基盤の底上げこそ解決の最短と考えております。

<活動の内容と方法>

実施はファラコバ（農水省・ネリカ米研究機関）の研究員2名、技術者1名が中心となり、参画している地域住民に指導する形で、開墾、籾の選定、畝上げ、肥料、除草剤の混入、種蒔き、草取り、収穫と進められていきました。JBFA及びADS（ブルキナファソ政府登録の地域NGO）とファラコバとは、籾の入手、技術指導ということもあり2年間の契約を結び事業を実施しています。また、参画している住民を交代で、約500km離れたファラコバの研究所に長期派遣（日当無料）するなど、住民の技術習得には積極的に協力しています。

実施地域の耕地面積は6,000坪に及びますが、初年度、初の試みということもあり、実施地域の土地にどの種類の籾が適しているかを見極めるため、耕作面積を2,000坪にし、ファラコバで研究・改良された40種類のネリカ米籾を選定し地域の青年部・婦人部が中心になり稲作を行いました。

<活動の実施経過>

ネリカ米も、計画当初は10種類の籾を選定し稲作を行う予定でしたが、このサピナ地域では初めての稲作試みであり、どのネリカ米の籾が有効かのデータがないことから、

ファラコバとの協議の結果、選定された40種類のネリカ米の籾を蒔くことになりました。ファラコバとの契約も2年と決められていましたので、短期間にその土地にあった籾を決定しなければならなかった背景があります。また、比較稲作として日本から持ち込んだ「コシヒカリ」「キヌヒカリ」の籾も同時に蒔きました。ネリカ米は乾田ですが、コシヒカリ、キヌヒカリは、灌漑を作り水田で行いました。

2004年6月、農水省（農業省と水利省が合併）への挨拶、サピナ村の管轄であるナウリ州のバンバラ・ミッシェル知事へ事業開始の報告を行った後、サピナ村へ正式に事業実施の通達を行いました。通達式は村長、農業委員を始めとする青年部、婦人部が100名以上参加しましたが、この参加したメンバーの20名が事実上のネリカ米稲作管理組合員となり、村長が管理組合長に就任しました。

6,000坪に渡る稲作予定地域の開墾はトラクターをレンタルして行われ、また稲作実施地域(2004年度の耕作面積は2,000坪)はサピナ村の男性住民が交代で土を細かく砕き、肥料、除草剤を土に混入してから畝をあげました。

種蒔きは婦人たちの役割で、畝の上に約60cm間隔で一直線に紐を張りめぐらせます。その張り巡らした紐の下に、手で深さ5~10cmほどの穴を開け、ネリカ米の籾を3~5粒を丁寧に蒔き、土をかぶせていきました。

また、40区画に分けた稲作地には、蒔いたネリカ米の品種が記載された立て看板を立て、管理しました。

発芽は種蒔き後約1週間後で、その後、気温が高いこと、雨季に入っており十分な水があったことから約2.5ヶ月で約1mにも生育しました。水田の稲と違い背丈は高く太いのが特徴です。

除草剤を混入したとはいえ雑草もやはりたくましく育ち、栄養分を取られないためにも除草は重要な仕事です。除草は女性の分担になり、毎日数名が交代で作業に従事しました。勤勉さで知られるブルキナファソ人の通り、丹念に除草しネリカ米の畑はいつ見ても雑草が生い茂っていると言うことはありませんでした。（除草剤は雑草を全て取り除くのではなく、生育を押しえらと言ったものです）

ネリカ米は、干ばつ時に水はなくても育つと言われておりますが、やはり水があった方が生育も早く実りも多いです。

2004年8月になると、稲の茎がふっくらとふくらみ始め、その後10日ほどで穂が出始めます。稲穂には白い小さな花が咲きます。その頃の稲穂は押しつぶすと白い液がでてきますが、1ヶ月ほどすると堅くなり稲穂が垂れ下がってきます。そして、稲が枯れはじめ、茶色く変色すると刈り入れの時を示します。

順調に育ったネリカ米も10月に2回に分けて刈り入れ、籾摺りが行われたあと保存袋に納められました。

当初、収穫祭にはサリフ・ディアロ農水大臣が出席したいとの申し入れがあり、日程調整もあり2005年2月に収穫祭を行うことになりました。（結果的には、収穫祭当日は閣僚会議が開かれ農水大臣は欠席となりました）

収穫祭には州知事をはじめ、地域有力者、関係者を招いて行われ、40種類のネリカ米の試食が行われました。

参加者は、近隣6ヶ村(2005年に実施地域)の役員を含め約200名が参加、試食が行われ、収穫量、味、色、大きさなどを基準に5種類が選定されました。その後、ブルキナファソ料理と共に参加者に振る舞われましたが、大好評でした。

この収穫したネリカ米の内、2種類(収穫物として添付)は日本でも実験栽培(白井市と彦根市)が行われ、白井市では小学校の総合学習の一環(2004年度より実施)として栽培されており、見事に実ったネリカ米は9月末に収穫する予定になっております。

<活動の成果>

技術指導団体であるファラコバの提案で、規模(耕作面積)を縮小、そのことで収穫量はおちましたが、40種類の籾を蒔き、土壌にあったネリカ米の籾を選定したことは、今後の稲作にとって良い結果となるはずです。

ネリカ米の稲作は実施以前から反響を呼び、住民も積極的に稲作に参加していました。その背景には、数年に一度襲いかかる干ばつの恐ろしさを知っているためであり、自分たちの力で村を守らなければならないという現れでもありました。

稲作実施中は、近隣の村落からも村長一行をはじめとする見学者がひきりなしに多数訪れ、その全員が誘致を願い出ていました。それだけに、実施地域でのネリカ米の稲作はセンセーショナルであり、農村地域住民の羨望の的でもありました。

数値的にだけ見ると、収穫量は予定数量の約1/3(約6トン)でしたが、耕作面積を縮小したことや試験的に40種類の籾を蒔いたことを考慮に入れると、坪収穫率としてはある程度到達されたと思われれます。

また、ネリカ米の稲作が可能ということ、住民が体感したことは何よりも大きな収穫であり、2回目以降の結果を得て、生活基盤の底上げが可能になることを確信しており、目的はほぼ達成したと思われれます。(2005年度は、サピナブランドとしてネリカ米を出荷予定)

収穫したネリカ米は、籾を取り除いた残りを住民に均等に分け与える予定でしたが、村役員との会議で、飢饉に備えて村所有としての備蓄ということが決まり、次回からの収穫に関しては住民に分け与えるということになりました。

ネリカ米と同時に蒔いた日本のコシヒカリ、キヌヒカリは、ネリカ米より生育が早く、また収穫も負けずと劣らずで、ファラコバの研究者たちを唸らせ、日本の農業技術の高さを知らしめる一幕もありました。ただ、これらのコシヒカリ、キヌヒカリは水田であるため灌漑が必要になり、普及にはかなりの年月がかかります。ファラコバとしては今後、コシヒカリ、キヌヒカリも研究の一端として加えることになり、よりよい米作りに拍車がかかることを期待してやみません。

稲作管理組合については、村の青年部が中心になって作ったADS（NGO）のスタッフがほとんど重複するため、ADSが中心になって管理することになりました。そのことにより、住民の意識を高めることとして、住民がボランティア（無償・経費の削減）として開墾や畝上げ、除草作業などに参加してくれたことは喜ばしいことでした。

収穫祭には州知事など著名人が多数が出席するなど、さらにはブルキナファソのメジャー新聞（写真参照）にもカラーで大きく取り上げられるなど、この「ネリカ米普及事業」は、今後のブルキナファソ農村地域を救う救世主として注目を浴びていることに違いありません。また、いかにネリカ米の果たす役割が重要かを物語っております。更に、収穫祭は日本のNGOへの感謝の気持ちも含まれており、歌、踊りなども披露され感謝の気持ちを表しておりました。

式典の中で、バンバラ州知事、村長は「他国のNGOや政府援助の届かないサピナ地域での活動に深く感謝しています」とお礼を述べられており、支援してくださっている日本の方々に呉々も宜しくお伝え下さいとのことでした。

<今後の課題>

2005年度のネリカ米の稲作は、サピナ地域はもちろんのこと、近隣の6ヶ村でも新たに実施されており収穫が期待されております。また、他村落からも研修者が参画しており、年々近隣村落へと広がっていくものと思われます。ただ、収穫した籾は同じ土地で使用することができず（サピナ村での2回目は残りの耕作地で実施中）、3年目以降ファラコバから籾を購入しない予定で進めている以上、他村落でのネリカ米稲作が急務になってきます。（収穫した籾の交換）

住民への技術指導は、ほぼ完璧に行われておりますが、経験が浅いため何かあったときの対処方法までは把握できておらず、ファラコバの技術指導が終わる3年目が正念場となり、必要に応じて再度の研修実施を行う必要があるものと思われます。

またJBFAとしても、援助実施地域では診療所の建設（2005年度は分娩室の増築）も終了し、2005年7月より近隣の村落を含め12ヶ村（全国では20数ヶ村）で、ポンプ式の深井戸の掘削事業が展開されております。安全な水の供給と共に、ネリカ米の稲作や共同菜園などにも使用され、全く雨の降らない乾季でも作物を作ることが可能になります。